

遺跡シリーズ 大谷遺跡(おおだにいせき)

-弥生時代の水田で見つかったロケット砲弾の着弾痕-

米子市陰田町から皆生に至る、県道300号線の建設工事に伴い、平成19年に大谷遺跡の発掘調査を実施しました。現地は、ローソン米子大谷町店のすぐ前の道路にあたります。

大谷遺跡は、隣接する目久美遺跡と同様の弥生時代の水田遺跡で、発掘調査ではシカの絵を描いた絵画土器や、ナスビ形鍬の未製品が出土しています。弥生時代の水田は、現地表面から1m以上掘ったところで検出しましたが、その水田の中にヒョウタン形の穴があいていました。この穴は、底面がすり鉢状になっており、人が掘ったにしては不自然な形だったので、調査中から何となく違和感がありました。

この穴の中からは、炸裂したように変形した円筒形の金属片が出てきました。手のひらサイズの小さなものでしたが、手に持ってみるとずっしりと重く、もしや爆弾の破片ではないかと思いましたが、当時はこの周辺で空襲が行われたことを知らなかったため、その破片は廃棄してしまいました。

その後、米子市内での空襲被害について調べる機会があり、遅まきながら調査地点のすぐそばで空襲があったことを知りました。この時の空襲は、昭和20年7月28日の早朝に、30機以上のグラマンが飛来し、美保基地や米子駅に攻撃を加えましたが、その中の一つのグループが大谷変電所を標的として、機銃とロケット砲弾による攻撃を行いました。大谷変電所への空襲を目撃した人の証言※によると、変電所に命中しなかったロケット砲弾が水田に落ちて3mほどの穴をあけ、周囲の稲は爆風で円すい形にカミソリで切られたようになっていたそうです。

発掘調査で見つかった穴は、このロケット砲弾の着弾痕と考えられますが、現代の水田面から1mほど下にある弥生時代の水田面にまで達していたことから、爆弾の威力は相当なものだったと想像されます。
(佐伯)

※昭和57年『鳥取県の戦災記録』鳥取県の戦災を記録する会

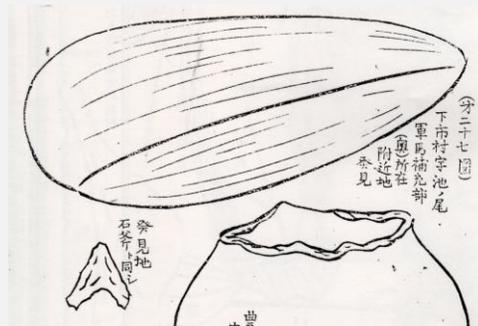


赤い矢印が着弾痕。後ろには、現在の変電所の建物が見える。

コラム 米子の考古学史 ①大山軍馬補充部での石鏃発見

米子を中心とした鳥取県西部地方は、かつては考古学の先進地として全国に知られていました。その始まりは、明治29年に大山の軍馬補充部所員の關長次郎により、数個の石鏃が発見されたことがきっかけだといわれています。この石鏃の発見に大いに触発されたのが、逢坂の素封家・橋井半雲でした。半雲は天保10年に大山町安原で生まれ、橋井茶田の養子となり、家督を継いだ後は積極的に慈善活動を行うなど、地域の発展に尽力しました。一方では、美術・骨董の趣味があり、軍馬補充部での石鏃発見以後は考古資料の収集に目覚め、周辺の遺跡から採集された石器などを大量に集めました。その数は、石鏃だけでも3万点以上の数に上ったそうです。

大山軍馬補充部の石鏃は、のちに足立正が明治34年9月発行の『東京人類学会雑誌』第十六巻、第百八十六号に寄稿した、「伯耆国高麗山麓ノ古窟（附タリ坪井博士ノ探討）」に、下市村字池ノ尾出土の石斧とともに図が掲載されていますが、所有者は高橋正照となっており、現物は所在不明となっています。（佐伯）

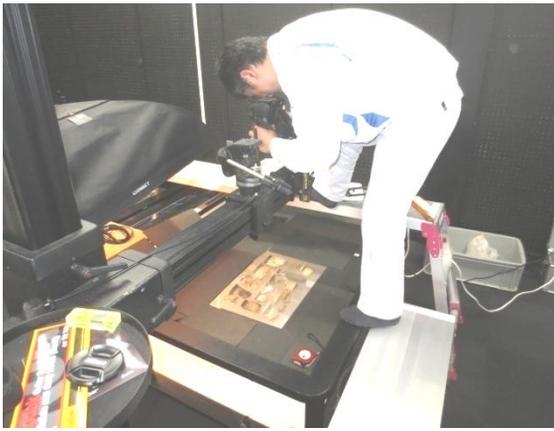


整理室 たより

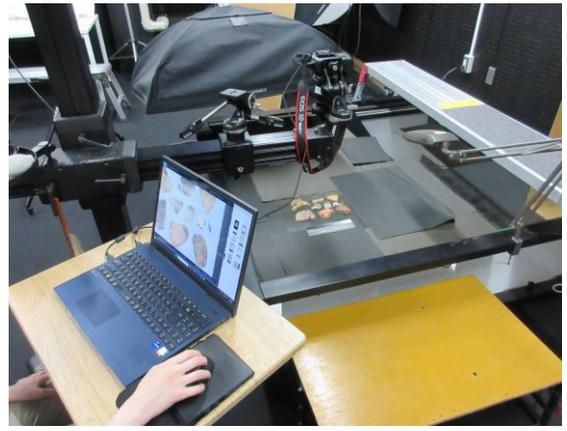
— 遺物撮影用のカメラを新調しました —

今年度から、埋蔵文化財センターで使用する遺物撮影用のデジタルカメラを新調しました。思い返せば、かつてセンターの写場で使用していた撮影機材は、4×5インチの大判フィルムカメラをメインに撮影していましたが、時代の流れでフィルム等の資材が入手困難となったため、嫌々ながらニコンのデジタル一眼レフカメラD200へと切り替えたのでした。それも昨日のことに思えますが、デジタルカメラの導入から早15年近くが経ち、そろそろ寿命が近づいているのを感じていました。

今回導入したのは、キャノンのEOS 5D mark IVです。このカメラは、パソコンをケーブルで直接繋いでパソコンのモニター上で絞りやシャッタースピードをコントロールすることができ、撮影した画像がその場で確認できるメリットがあります。これまで、ファインダーを覗くためにカメラスタンドと俯瞰撮影台の間を何度も上り下りした苦労は一体何だったのか…とありますが、これからは末永く活躍してくれることでしょう。また、ストロボもジェネレーターとヘッドを増設しましたので、これからは大型遺物の撮影も室内でできるようになりました。（佐伯）



以前の撮影風景・・・膝も腰も痛い！



これからは、椅子に座って楽々撮影

埋蔵文化財センター・ 福市考古資料館日誌

- 4月 1日(火) 山陰歴史館に中原斉館長が着任。中原館長は、埋蔵文化財センターの調整官も兼務。
- 4月23日(水) 下高館長の案内による、米子城下町ガイドを実施。
- 4月25日(金) 米子南高校の生徒が遠足で来訪。目久美遺跡の試掘調査開始。
- 4月27日(日) 「米子つつじ祭り」のため、埋蔵文化財センターのグランドを臨時駐車場として使用。また、これに合わせて埋蔵文化財センターも臨時開館。
- 4月28日(月) 五千石小学校の児童が遠足で来館。
- 4月30日(木) 尚徳小学校の児童が遠足で来館。
- 5月18日(日) 義方校区民歩け大会に、城山ガイドとして下高館長が出席。
- 5月22日(木) 奈良県立橿原考古学研究所の中野咲氏が資料調査のため来館。
- 5月31日(土) 米子児童文化センター連携事業として、「米子城を知ろう！」を開催。
- 6月 1日(日) 車尾公民館の城下町ガイドで、下高館長が解説。
- 6月14日(土) 米子城下町のガイドウォークは雨のため中止。
- 6月16日(月) 古環境研究所の松田隆二氏と高橋敦氏が来館。
- 6月19日(木) 福市考古資料館を五千石小学校の2年生6名が校外学習のため来館。
- 6月24日(火) 企画展の終了に伴い、福市考古資料館の常設展示をリニューアル。
- 6月26日(木) 伯耆古代の丘公園のロビーに、向山古墳群から出土した遺物を展示。
- 6月27日(金) 日南町人文学園の講師として、佐伯次長が「日南町の中近世遺跡」を講義。尾高城跡の特別公開(30日まで)。
- 6月28日(土) くらしき作陽大学の澤田秀実氏と、富山大学の長柄毅一氏が資料調査のため来館。

編集後記

今年は、戦後80年の節目の年となります。7月20日から米子市美術館で開催する「未来へ伝える昭和の戦争」展では、これまであまり公開されていない、遺跡から出土した焼夷弾や戦争絵の茶碗などを展示します。戦争の痕跡は、遺跡から出土した遺物にも刻まれています。

今年度から、埋蔵文化財センターたよりの編集を担当します。今号から、表紙のタイトルに米子市埋蔵文化財センターのマスコット「ハニゾウ」も登場しています。

コラムでは、米子を中心とした地域の考古学史にまつわる記事などを少しずつ紹介していきます。3ヵ月に一度の刊行ですので、長期連載の企画となります。(佐伯)

発行日 令和7(2025)年6月30日
発行者 米子市埋蔵文化財センター
所在地 鳥取県米子市福市281番地
指定管理者 (一財)米子市文化財団
電話・FAX 0859-26-0455
Eメール yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp